父親参加の子育て支援に関する研究
－「もち米づくり」の実践から－

名須川　知　子
（兵庫教育大学）
岸　本　美保子　　小　林　みどり　　壺　井　ゆき子
（兵庫教育大学附属幼稚園）

子育て支援の事業として，附属幼稚園では平成18年度から「親プログラム」の研究開発を実施している。その一環として，「おやじの会」としての父親参加の子育て支援活動も行っている。これは，PTAのサークル活動のひとつとして，自発的に活動しているものだが，その活動の中でも「もち米づくり」活動は，長期間にわたっておやじの会が中心になって実施しているものである。その活動をとおして，父親が幼稚園での活動に参加する意味と，田植え活動の意味について考察し，子育て支援における成果を明らかにした。

キーワード：父親参加，子育て支援，もち米づくり

名須川知子：兵庫教育大学大学院・基礎教育学系・教授，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1，E-mail:nasukawa@hyogo-u.ac.jp
岸本美保子：兵庫教育大学附属幼稚園・副園長，〒673-1421 兵庫県加東市山国2013-4，E-mail:mikishimo@hyogo-u.ac.jp
小林みどり：兵庫教育大学附属幼稚園・教諭，〒673-1421 兵庫県加東市山国2013-4，E-mail:kobayashi@hyogo-u.ac.jp
壺井ゆき子：：兵庫教育大学附属幼稚園・教諭，〒673-1421 兵庫県加東市山国2013-4，E-mail:thuboi@hyogo-u.ac.jp

Research on the Child Care Support with the Father Participation: In the practice of "Growing Glutinous Rice"

Tomoko Nasukawa
(*Hyogo University of Teacher Education*)
Mihoko Kishimoto, Midori Kobayashi, and Yukiko Tsuboi
(*Kindergarten of Hyogo University of Education*)

Fathers of kindergartener participated in the "Fathers Association" and supported child caring at the Kindergarten attached to Hyogo University of Teacher Education. They voluntarily took a leading role in an activity that is growing glutinous rice. This activity is one of the PTA activities and also a part of the "Parent Program" that has been developed and carried out from 2006. The implication of father participation in kindergarten activities, and rice planting activities were discussed and the effect of the child care support was examined.

Key Words: father participation, child care support, glutinous rice-farming

Tomoko Nasukawa: Hyogo University of Teacher Education, foundation pedagogy, professor, 942-1, Shimokume, Hyogo 673-1494 Japan. E-mail: nasukawa@hyogo-u.ac.jp
Mihoko Kishimoto: Hyogo education university attached kindergarten, vice-director, 2013-4, Yamakuni, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail: mikishimo@hyogo-u.ac.jp
Midori Kobayashi: Hyogo education university attached kindergarten, teacher, 2013-4, Yamakuni, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail: kobayashi@hyogo-u.ac.jp
Yukiko Tsuboi: Hyogo education university attached kindergarten, teacher, 2013-4, Yamakuni, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail: thuboi@hyogo-u.ac.jp

1．はじめに

現在，幼稚園における子育て支援の事業は様々な形でなされ，本園でも平成18年度から文部科学省の研究開発を受け実施している。その支援の対象は，まず在園児の保護者，それも母親が中心だが，本来は両親を含めた家族支援となるべきものであろう。そこでまず，19年度から「おやじの会」を発足しPTAの組織の中に位置づけ，できるだけ自発的に活動を行ってもらっている。本附属幼稚園における「おやじの会」は以前からあったが，ここ数年中断していた。ここで，保護者のさらなる参加と幼稚園側の双方のかかわりを深めるために，唯一男性役員だったPTA副会長（18年度）が中心となって再度実施してもらうこととなった。事業内容は，幼稚園に関すること，特に環境整備についてお願いした。環境整備は，ただ単に幼稚園教諭だけでは十分に出来ない分，教師・幼児・保護者が一体となって自らの学ぶ場を整備する，という教育的価値を含んでいると言えよう。また，同時に本大学の中期目標である附属学校での子育て支援の充実に関する事業として位置付くものである。そこで，園と保護者が共同してつくる幼稚園のグリーン化のひとつとして，平成18年度に遊戯室前の中庭に泥田をつくり，19年度からそこでの田植えを実施した。

本報告では，「おやじの会」を中心にした「もち米」づくりをめぐって，園内整備に保護者がかかわる意味，特にPTA活動に父親がかかわる意味，そして，PTA活動に関する教育課程へのかかわり方について考察したい。

2．「おやじの会」の概要

本園での「おやじの会」は，平成18年度のPTA副会長が中心となって，保護者の父親に呼びかけたものである。前述したように，以前には，PTA会長と園長で「おやじの会」が実働していたこともある。今回は，平成18年度に，メンバーも新たに再度呼びかけを実施した。趣旨は，「子ども達，園のために父親として何かがしたい！というおやじの集まり」ということである。PTAから全家庭にプリントが配布され，その中で趣旨に賛成できる者が応募した。まず発足式は，飲み会形式で外部で実施され，そこで，「おやじの会」としてやってみたいことをそれぞれ出し合った。その概要は，18年度には，Tシャツづくり，泥田づくり，タイヤのペンキ塗り，星空カーニバルでの紙飛行機づくり，キックベースボール大会，等であった。19年度は，田植え（苗床づくり，苗植え，農薬まき，草引き，水田管理，収穫，稲木づくり，脱穀，餅つきの実施），凧づくりと凧揚げ，わくわくキャンプ時の花火打ち上げ等であった。この中でも，田植えの実施について，経過を記述する。なお，以下の写真はいずれもおやじの会の世話人の藤田さんが撮影し，ブログに掲載しているものである。許可を得て，ここに掲載させていただいている。

3．田植えの実施

(1) 田んぼの耕し（4月21日）

平成18年度にまず，泥田を作るため遊戯室と5歳児の保育室の間の場所に枠をつくり，加美町からトラックで泥田をもってきてくれた。写真1は，19年度にも再度田んぼの泥を当時会長の細田さんの実家の田んぼの加美町からトラックで運び入れ，さらに土を掘り起こして，泥田をつくっている様子である。この活動は，4月21日（土）に実施してくれた。土曜日ということで8名の「おやじの会」のメンバーが参加してくれた。朝の8時半に幼稚園に集合し，2トントラックの準備も含め，すべて「おやじの会」で行ってくれた。夕方までかかったそうである。

写真1　泥田の作業をする「おやじの会」のメンバー

(2) 稲の種まき（5月10日）

その後，6月はじめに田植えをするまでに，この泥田でどろどろになって幼児が活動した。

次の写真2～3は，5月10日にもち米の種を保護者と一緒にまいている様子である。この時にも，おやじの会のメンバーとPTAの役員が年長児に指導をしてくれた。ビニール手袋を使用し，パラパラともち米の種を苗床5つにまいた。

(3) 田植えの実施（6月6日）

いよいよ，発芽した苗を田んぼに植える。写真4は，手作りのビニールハウスで発芽させた苗を，田植えとして植えている場面である。5歳児が本格的な「田植え」の経験をしている。この日は，平日であったため，1名の「おやじ」と数名の「おふくろ」が協力して田植えをすることが出来た。この様子は，加東市の地域情報セン

写真２　幼児と一緒に種まき（５月10日）

写真３　PTAのお母さんとも相談しながら

写真４　一緒に苗を植える（６月６日）

ター（ケーブルテレビ）の６月12日から15日の「ニュースかとう」で４分間上映された。

（4）稲の生長の様子（６月～９月）

写真５　田植えの終了後

写真６　苗が少し成長した状況（６月17日）

写真７　まだ穂は垂れていない（８月７日）

６月に田植えをした稲は，７月20日以降の夏休みにどんどん大きくなる。その間，「おやじの会」で害虫がついていないか，水は十分であるか，雑草は生えていない

か，こまめにチェックをしてくれている。

また，夏休み期間中は毎日交代で親子で水やり当番をしてくれているが，その時にも飼育小屋で餌をあげるときに，その前の田んぼをみることが出来る。稲の生長を気にしてくれている。8月14日に穂が出た。

写真８　稲穂が垂れている（９月１日）

この稲穂が垂れる時期になると，水をたっぷり与えることが必要になるそうである。これは，おやじの会の藤田さんがご自分の「おやじ」の意見を聞きながら稲作にあたっているため，稲作のポイントをおさえながら実施している。稲が少々黄色かかっていたので，肥料も必要であることがわかった。その肥料もお願いでき，その後青々とした稲を見ることができた。途中，農薬も必要に応じてまいてもらった。

（5）稲刈りの実施（10月11日）

そして，いよいよ稲刈りを実施する。写真９は10月の稲の収穫の様子である。運動会をはさんで，10月11日に５歳児を中心に実施した。４歳児，３歳児も様子を見せてもらい，４歳児も５歳児と同様に，PTAのお母さん方に手伝ってもらいながら，稲刈りを体験した。この様子も加東市のケーブルテレビで放映された。

（6）稲木干し（10月11日）

写真10は，稲が無事に刈り終えた後，「稲木干し」をした様子である。幼児が一人一束ずつ干していく。稲木の準備は，藤田さんが自分の「おやじ」に教えてもらい，木を組んでくれた。周囲に幼児の自作の案山子をさしている。案山子は雨でぬれないようにビニール袋に入れている。

稲木干しをした後，幼児は稲の下にもぐって稲の様子とにおいを全身で感じていた。藤田さんのコメントである。「園内のそこだけ一角が，本当に田んぼの中です。

写真９　慎重に稲を刈る様子。４，５歳児が体験した。

写真10　稲木に干す

昔なつかしい田舎の風景。なんともいえない安らぎを感じました。きっと子どもたちも同じ気持ちだったのではないでしょうか。」[1]　このように，実施した当事者も子どももそして職員も一同，稲の香りを味わいながら，心地よい気持ちになった。

（7）脱穀の実施（11月）

さて，次は脱穀である（写真11）。この脱穀機は大正時代から使用しているもので，藤田さんの「おやじのおやじ」から借りたものである。脱穀は今は珍しい足踏み脱穀機による手作業で，この作業も保護者とともに実施した。その後，約４kgのもち米は，12月のもちつきの際のお米となった。

４．「おやじの会」の意味について

本園の「おやじの会」の趣旨には，次のように示されている。「どうしても幼稚園では母親が中心となったPTA活動になってしまいます。父親でPTA活動に関わろうと思うと，どうしても会長などの役員でないとなかなか難しいのが現状です。でも役員になるのは抵抗がある

写真11　足踏み脱穀の様子

が，何か子どもたちにやってあげたい，園の活動に協力したい，というお父さんも結構おられるのも事実です。いくらやる気があっても一人ではできません。そこでその思いを抱いておられるお父さんたちの集まりとして『おやじの会』があるのです。」[2]

現在全国的に，父親とのPTA活動として，「おやじの会」や「Pマンの会」という名称で，多くの団体が活躍している。その数は，3000〜4000団体とも言われている。そして，それらの「ゆるやかなネットワークづくり」として，日本「おやじの会」連絡会が平成17年に設立されている。その設立趣旨及び基本理念は，会則，規約もつくらず，会長，代表もおかない「ネットワーク型組織」として，会員一人一人がこの連絡会の代表であり，会長であるとされ，それぞれが会の情報交換，支援等を行うことが明示されている[3]。本園は，その活動に従事しているわけではないが，自主的に楽しく和気藹々として活動している様子は，まさしく，この上記の趣旨に重なるところがあるのではないかと思われる。また，このようなサークル活動は，父親の「当事者活動」としてとらえられ，子育ての父親の自覚の向上や，子どもをとおした地域活動としての意義が確認されている[4]。そこで，本園の活動をとおして，①園内整備の保護者，特に母親中心のPTA活動に父親がかかわる意味，②幼稚園行事に関連した「もち米」づくりの意味について，実践を検討していきたい。

①　PTAにおける「父親」の存在

PTAの活動は，主に保護者の中でも母親が中心となっている。中には，PTA活動イコール母親による活動とされているところも多い。しかし，本来は，英語のParentsの頭文字であるPが用いられているようにその趣旨は，両親である。しかしPTA連合会の役職は父親で占められているものの，殆どが母親である。本幼稚園もそれらと同様に，毎年４月当初のPTA総会の出席の99%が母親で占められているが，会長職は父親である。平成18年度は会長が母親でもあったため，園長（女性）の要請として父親に副会長になってもらい，唯一の男性役職者である副会長に「おやじの会」を復活してもらうことを依頼したのである。それは，役職が彼を除いて女性ばかりであったことで，もっと父親に活躍してもらう場を提供したかったこと，父親がPTAに参加する意味は，子育てが両親でそれぞれの役割を担いながらされている雛形ととらえるからである。欧米では，PTAに父親が積極的にがかかわっている。わが国でも当然そのようにあるべきだということは，理屈としては誰もが思うところであるが，実際には仕事をもっている父親の参加は難しいであろう。しかし，実際の活動は出来なくても，幼稚園の活動に関心をもってもらうことは，子育てにとってもファミリーサポートとしても重要な意味があると考える。多くの母親の子育て不安は，周囲の無理解にある。実際に子どもの世話は母親が多くを担うことを了解している者であっても，周囲のもの，特に父親が子育てに関心をもってくれているか，そうではないか，あるいは，協力的な意志をもってくれさえすれば，実際に時間をもてなくても何とかがんばれるという母親は多いのである[5]。このような調査からも，母親の子育て支援のサポートとしての父親の存在は大きなものがある。実際に両親がいて，家庭というものがありながら，その機能は十分活かされていないのが現状である。そのような家族関係の中で，子どもが通園している園の活動を共有して話題とし，情感を交わすことは家族全体にとっても意義あることと言えよう。

②　教育課程としての「田植え」の意味

田植えは，本園の教育課程の一環として，幼稚園の園環境を教師だけではなく，幼児，保護者も共に学ぶ場をつくるということで「グリーン化」をめざして実施したものである。実際に教育課程に位置づけることで，５月連休明けの泥田遊びから，６月の田植え，10月の収穫，案山子の製作，11月の脱穀，12月のもちつき，という一連の活動となった。その後，脱穀した稲はクリスマスのリースづくりや草履づくりにも活用された。このように，園舎内のグリーン化を三者で協力して実施する教育目的を果たすため，５歳児保育室と遊戯室の間のスペースを４月から泥田にして６月まで十分遊び，その後，自分たちで種まきした稲を植えることを実施した。いずれも，教師とPTAおやじの会を中心とした保護者たちが相談し，手伝いが可能な保護者に協力を願って脱穀からおもちつきまで実現ができた。さまざまな場面で多くの保護者の協力を得ることができた。教師と幼児だけでは，この計画を実現することは難しかったと思われる。途中，おやじの親父にあたる幼児の祖父にもご指導をいただきながら田植えの一連の作業が可能となった。まさしく，三者

が協力して学ぶ場をつくり，同時にお互いの大きな学びを得られたことと思う。さらに，それらの活動が「稲作」という活動をとおして，長期間にわたってつながって活動できた。幼稚園は様々な行事があるが，ひとつひとつが細切れになる可能性も大きい。そこで，それらを継続して活動を展開していくこととして稲作の教材は意義あるものと言えよう。さらに，おもちつきでは，幼稚園で収穫したもち米だけでつくったおもちを食することができた。これは，格別の味がした。その際にも幼児の祖母の協力によっておもちつきが可能となった。このことは，「食育」という面からも，生長する稲を見ながら，目の前で日々生長を見ている幼児だけでなく，普段あまり気にしていなかった周囲の稲穂の様子にも関心をもてるようになったことや，自分たちで毎日見て，一生懸命育てたもち米でもちつきが出来たことは収穫の喜びを味わう機会になったと思う。単に伝統行事の一環としての「おもちつき」ではなく，わが国の文化を実感することにもなったと言えよう。

このように，共通の目的に沿って，教師・保護者・幼児が一体となって活動でき，継続的に実施できるメリットがあった。

以上，従来の子育て支援にかかわり，父親の参加の意味が多く見いだされた。現在，よく言われる「親業」も上からのあるべき姿の押しつけではなく，まず自分の子どもや周囲の子どもとのかかわりから個人で見いだすものであろう。しかし，そのためにもまず，かかわる場をもち，ふれあいを実感して情報交換しながら，そして何よりも具体的な活動をいっしょにすることから推進していってもらいたい。本園のブログにも明確に示されているように「出来る人が出来る時にする」無理のない方法で実施していくことが重要であろう。

注

(1) http://hyoukyooyajinokai.blog62.fc2.com/blog-category-1.html 2008/09/01

(2) 同上

(3) http://www17.plala.or.jp/nippon-oyaji/profile.html 2008/08/29

(4) 柴崎智恵子『子育て期にある父親のグループ活動の意義と役割』平成14年度東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻　修士論文　pp.88〜90
http://www3.tky.3web.ne.jp/~chiekoss/yoyaku.html 2008/08/29

(5) 楠本洋子『子育て支援のあり方に関する研究―母親の子育て意識の変容を中心に―』平成19年度兵庫教育大学大学院学校教育学専攻　幼年教育コース　修士論文　p.84

（2008. 9. 1受稿，2008. 11. 28受理）